第十一回教化学研究集会研究発表要旨

沖縄の宗教事情と青少年教化

――青少年教化への法華七喩の実践――

鹿糠　堯順
（沖縄法華経寺主任）

沖縄の宗教はアニミズム的であり、その信仰体系は、簡素にして哲学的思弁なるものは完全に欠如しております。よって、聖典とか神学理論なるものは存在しなく、宗教美術は極めて未発達にして、沖縄の宗教を表現した建築物とか彫刻・彫像のたぐいは、ほとんどありません。

すなわち、創造的な表現を求めるような感動とか知的な複雑な事柄を消化吸収する意志がない宗教、それが沖縄の宗教なのです。専ら生物・無生物の別を問わずして、全ての物に精霊が宿っていると信じ、実利主義的に宗教を受容しているのが沖縄の宗教の特色なのです。

この宗教受容態度は、人々をして不幸の根源的原因を超自然の祟りと考え、危機の際の機能的意義をもって、沖縄の宗教は現在でも暗く地に根をはって、その存在を意義たらしめています。

さて、哲学的思考なき宗教の中で生れ育った沖縄の人々は、仏教をどのような姿勢で受容したか。その結果、「葬儀屋仏教」の誕生を見るに至り、綿々としてその体質を変えず現在に至った理由を、沖縄の歴史を通じて赤裸々に浮きぼりにして説明します。

沖縄の仏教（既成教団を対象）は、沖縄の宗教の例証する如く、哲学的思考なき仏教と位置づけて誤りなきを痛感し、その見識をもって論を展開します。所謂、世に問われる葬式仏教とも多少意味を異にして、あえて命名するなら、「葬儀屋仏教」と呼ぶのが適当と推察に及びます。

沖縄の寺院の大半は、修行の道場に非ずして死者慰安の場所との傾向が強く、殊更にそんな寺院のあり方に矛

盾を呈し、更に批するものはなく、寺院とはそういうものとしての見識の中で見定めています。

死者慰安者たる寺院の機能を刺激的に物語るものとして、「ユタ」と呼ばれる沖縄特有の呪術者の寺参りがあります。

ユタが寺参りをする時、普通二・三人の同行者を伴います。その寺参りも住職を無視して寺参りに及び、同行者である依頼人と共に独自な祈禱(いのり)をするに至っております。住職に対しては、尊敬とか人生のカウンセラー的な位置をもって見ることはまず皆無にて、僧侶はあくまで葬儀の執行人との見方が強く、ごく自然のままに僧侶をもって執行人の位置付けがなされています。

ユタの方がより絶対的な力と尊敬をもって、人生諸問題をカウンセリングするのであります。このようにユタと寺院は奇異な関係でありますが、葬儀及び法事以外参詣者のない沖縄仏教にとってユタは唯一の参詣者であるのです。この関係を繙(ひも)とかんとするなら、沖縄の仏教の歴史の中に糸口があります。そしてこの事は、政治的な背景より生じたものであることが容易にうかがわれると共に、沖縄に於ける哲学的思考なき宗教の中で育った沖縄の人々の宗教に対しての姿勢が、原因であることが明らかになった次第です。

その歴史の変遷をたどります時、一六一一年、薩摩藩が沖縄を侵略して二年目、早くも「掟十五条」を出し、その一項に「諸寺多く立て置かるまじき事」と規制したのであります。その後に於いても、仏教統制はこんな生ぬるいものではいかんとして、厳しく統制規制が加えられて参ります。一六六三年には、「人を集めて仏説の講談をするは無用、ことさら俗家へ参り談儀申さざる事、士町人に至るまで儒の道をたしなむべきが肝要」と厳しくなっていき、やがて一六八三年には、「僧は布施し托鉢して米銭を請うことを禁ず」として、一切の宗教活動を禁じられています。

かくして薩摩藩の仏教政策の狙いは、植民支配の確立にあり、見事という程に功を奏しました。葬儀及法事等の儀式のみ関わりをもって仏教を位置づけ、民衆と仏教を遊離したのであります。

その理由は、僧侶が布教・托鉢・集会を持つことより、

徒党を組んで一向一揆のような形に出ることを恐れたからです。

これらの禁制は、歴史の変遷と共にひどく仏教の衰退を招いたのであります。その様子を一六六四年と一六八三年の『冊封使録』には、殊更その零落ぶりを語り記しています。「寺は将棋碁盤を設けない所はなく、客が来れば盤を出す。飽きればそばに枕が用意されている」と、寺院そのものがすでに寺院の機能を失なっていたようです。

更に、寺院が「葬儀屋仏教」への体質を色濃くしていく様子を、一八一八年の『大琉球島航海記』には、「僧は臆病そうな忍従的な目付き・蒼白な顔色、みな不健康らしい」とある。要するに、これ以上軽蔑に値する人間はなく、僧侶とは不健康な人間の代名詞の如きものであったことを記しています。

この悲しき事実は、さらに時代を経るとより一層ひどいものとなり、一八四五年の『サマラン号航海記』には、「僧はみすぼらしく、非常に低い階級に属しているとし、葬儀の手助けをするのみ」と記しております。かくして、このような状態にあっては僧のなりてはなく、貧しい家の子を安く買って小僧に仕立てたことが、重々しく記録されています。

そして現在に至りましても、沖縄では僧侶への尊敬はなく、むしろ「ユタ」等の民間から生じた原始形態の宗教が民衆の中にはびこり、脈々とその意義を伝え現在に至り、沖縄仏教は葬儀屋体質の中に埋没しているのであります。

ちなみに、葬儀に対しては、宗派の区別なく、近くて便利のみをもって寺院の選択を計り、葬儀屋を選ぶが如き同一線の思考で寺院を選ぶのであります。

以上、沖縄仏教概観を歴史的な経緯を踏んで簡単に紹介しましたが、沖縄開教するにあたり、この経緯を背景に二つのテーマを設定して開教にあたりました。やがてそのことが、青少年教化へと展開したのであります。

㈠　葬儀会場となった寺院を、修行の道場とする。

㈡　一般の人々を寺参りさせ、本来の仏教理念にあった寺院へと発展させ、教化の日々ある寺院を目指す。

この二つのテーマを充足するものとして、古来より本宗

に伝わる参籠修行を以って、この十二年にわたり不断として精進したことが、地域に於ける青少年教化に大きく貢献したのであります。

事の始まりは十三年前、周囲の中学校等に於けるシンナー問題に悩む先生・父母等よりの相談から始って、当時の沖縄県浦添市城間にあった「日蓮宗布教所」を、シンナー吸引者更生に開放したことからであります。

具体的な内容経過として、シンナー吸引者に於けるところの学校の校長及び父母の依頼により、登校不可能及び家庭謹慎と思われる生徒を依託依頼をうけ、一定期間を定めて隔離して監禁状態の中で教育する。而して、柵もなければカギを持って閉込めるのでもなく、規定されたことを守るなら身に危険なく心に苦悩なき安らぎの生むことを教えた、法華経第十四章安楽行品を以って参籠させたのであります。父母等には、寺にての日曜学校へ参加参詣して頂き、法華経第四章信解品の長者窮子の譬喩よりの放浪の子と一諸に汚物清掃した父の如く、子供の立場で時にものを考え修行して頂くことを願い行じさせました。

そうしていく次第より、登校拒否・自閉症と非行化した青少年を参籠させることにより、求道者も多く現われ、本宗の僧侶となった青年も十数名を数え、十三年間で参籠名簿に二百五十二名を数えています。

教育内容は、自己の最大の敵は自己なりとする仏教の基本的教えに忠実なる行いを主として、自からを吟味する力を育て、自己管理のできる人間となった時、更生へと門は開き、寺院は道場との威儀を整えたのであります。

さて、その自己吟味できる人間と成らんが為に、祈りの朝より事始まり、感謝を覚え報いなんとの給仕の毎日を強く要求します。又、やはり智慧なき者は、自己を問いかけ、吟味することあたわずとばかりに学習することを日課に組込みます。世に称される非行に走りがちな青少年は、労働意欲に乏しく、スポーツ等による体力の養成をあまり好まない「ブラブラ人間型」にして、薄志弱行の故、体力養成を兼ねた労働時間を持つ「祈り」「労働」「学習」の三つの基本柱を軸として、法華経第三章譬喩品に説かれし「憶念」の世界に入ることを願行させるのであります。実に青少年教化は、法華七喩の実践であり

ます。

暗く深い穴の中より救いの声を発し叫ぶ青少年の声を、自らの信行と主体的に受け、立ち向うことが沖縄開教と心得、青少年教化に携わっています。やがて十三年の青少年教化活動は、全国に知れるところとなり、本宗関係はもとより、多くの人々に参籠を頂いております。

自負するところ、寺院を道場として、葬儀屋仏教の範疇に入ることのない沖縄法華根本道場法華経寺を、皆帰妙法へ前進すべく本願をいだきし毎日です。